

ピンクリボンNEWS japan

2013年 No.3

春号

発行人 特定非営利活動法人 J.POSH 編集 ピンクリボンNEWSjapan 編集委員会
発行所 J.POSH事務局〒538-0043 大阪市鶴見区今津南2丁目6番3号 TEL.06-6962-5071

J.POSH
日本乳がんピンクリボン運動®

TOPICS

遺伝性乳がん：遺伝子検査や カウンセリング、あれこれ

日本の乳がんは相変わらず増えています。日本での乳がん罹患者は年間60,986人(2007年)、死亡者は12,838人(2011年)という数字です。海の向こうのアメリカでは2013年の推定乳がん罹患患者数は234,580人、死亡者は40,030人です。日本の数も多いですが、やはりアメリカの乳がん事情は半端ではありません。それだけ乳がんについての関心も非常に高いことが容易に推測できます。アメリカのニュース番組などを見ていると乳がんについての記事をよく目や耳にします。最近では、昨年の12月にタモキシフェンの投与期間が現行の5年服用よりも10年のほうが無病再発期間や全生存率が良くなることをいち早く大々的に取り上げていたのは非常に印象的でした。

さて今回のメインテーマは、日本でも少しずつ認知度が高くなりつつある遺伝性乳がんについて、特に検査の内容やそのタイミング、さらにはカウンセリングについてです。ご存じの方もおられるかと思いますが、乳がんの約8%(1割弱)は遺伝性に発生します。前述のごとく2007年の推計で日本人の乳がん罹患者は約6万1千人、この中の1割の約6千人のかたが遺伝性による発症です。ちなみにアメリカでは約2万人が遺伝性乳がんです。なんともすごい数です。この数の人たちがだけでも乳がんの発症を早期でくい止めることができればそれは乳がんから命を救う大きな一歩になるでしょう。ですから進んで遺伝子検査を受けましょう、というふうにはなかなか進んでいかないのが現実です。なぜなら、そのひとつの理由に社会的な問題があります。アメリカでは昨今遺伝子検査を受ける人が増えています。しかし、かつては医療保険や生命保険に加入するために強制的に遺伝子検査を会社から受けさせられたり、もし遺伝的に陽性であれば保険への加入を断られたり、ひどい時には会社を解雇されたり、といった、社会的な差別をうける受難の時代もありました。しかし、2008年に遺伝情報差別禁止法が制定されて以来、国民の遺伝情報が保護され差別的な用途に利用されないことが保障され、遺伝子素因によって人を差別することは法律で禁止されるようになりました。ちなみに日本ではこういった問題はあまり整備されていません。

ふたつ目には、心理的負担があります。みなさんが健康診断で血液検査を受けるような感覚で遺伝子検査も受けられれば良いのですが、そうはなかなかゆきません。というのも結果の如何によってはそれ

が自分や家族に重くのしかかってくるからです。つまり受ける方にとってはストレスの大きい検査なのです。

ここで、実際の遺伝子検査について少し述べてみたいと思います。乳がんを発症する遺伝子は現在のところ幾種類か発見されています。その中でも、一般的に行われている遺伝子検査はBRCA1(ビーアールシーイーワン)、BRCA2(ツー)を調べるものです。BRCA1と2はもともと乳腺細胞のダメージを修復して正常な成長へと導く遺伝子なのですが、これが異常を来したり突然変異を起こすと乳がんを発展するというものです。検査の方法は普通の血液検査と同じで採血をするだけです。もし、乳がんになるリスクが高い女性にBRCA1またはBRCA2の異常が発見されれば、生涯の中で乳がんになる確率は最高で85%あるとされています。この乳がんになるリスクが高い人とは、例えば、親族の中に

1. 乳がんや卵巣癌になった女性が複数いて、特に若い年齢(特に50才以前)に発症した人がいる場合、
2. 両側の乳房に乳がんがきた人がいる場合、
3. 乳がんと卵巣癌を発症した人がいる場合、
4. 男性の乳がん患者さんがいる場合、などが該当します。

さて、どのタイミングでこういった検査をするべきなのか、ということも問題になります。自分が遺伝性疾患の体質を持っているかもしれないということを調べるわけですから、結果を知ることに対してある程度の覚悟が必要になるでしょう。ですから、今では検査を行う前に十分なカウンセリングを行うことが必須となっています。例えば、カウンセリングの中で、乳がんの特長・BRCA遺伝子と乳がんのリスク・遺伝子検査・乳がんの治療、についてどれだけ知っているか、また乳がんに関わる心理的ストレスの状態・遺伝子検査を受けるにあたっての心理的葛藤、などについても調べてゆきます。このようなプロセスを経たのちに検査を受けるか否かを決めます。このように遺伝子検査はいくつもの段階を経たのちに行われるものです。

次の時代への扉を開いて第一歩を歩みだす開拓者は多くの試練を経験しますが、この乳がんの遺伝子検査を受けるかたかたも同じ試練をされているのかもしれない。しかし、これから来るべき未来の新しい診断方法のひとつの扉を開けようとしていることは間違いのないでしょう。

目次

遺伝性乳がん：遺伝子検査やカウンセリング、あれこれ	1
乳がんTure-Zure「乳がん検診受診率50%達成のために必要なこと」	2
こんなピンクリボン運動をしました	3
J.POSH 25年度おまな活動のご紹介	4
あとがき	4

乳がんTure-Zure

リレーコラム 第3回



乳がん検診

受診率50%達成のために必要なこと

石川県立中病院乳腺内分泌外科 吉野 裕司

近年、日本では乳がんが社会問題になっておりますが、周知のごとく欧米では今の日本よりもさらに乳がん患者数が多く、もっと以前から乳がんが問題視されておりました。これらの国では最近乳がん死が減少してきているといわれています。我が国との大きな違いは乳がん検診受診率で、欧米の乳がん先進国のそれは70-80%とのこと。一方日本では、やっと30%に到達したところです。約10年前は、乳がん検診受診率が20%に満たなかったことを考えると、少しずつ受診率が上昇してきておりますが、それでも目標の50%には遠く及びません。なぜ日本では、乳がん検診受診率が上がってこないのでしょうか？

検診の重要性については、ピンクリボン運動等を通じて認知度はかなり上がってきているように思われます。ピンクリボン運動参加者に話を聞くと、みなさん乳がんについての関心が深く、検診の大切さを理解されており、ピンクリボンに関してはかなり普及していることを実感させられます。ただ、このようなイベントに来られる方達は、もともと関心がある人達ですので、乳がんについて知識を持っているのは当然のことかもしれません。問題は、全く興味がない層をどのようにしていくかでしょう。私は昨年、地域の町内会の役員をしております、ご近所の方とお話する機会が多々ありましたが、ピンクリボンのことを話しても

いまだにご存じない方がたくさんいらっしゃることに驚きました。

以下に私が聞いた声を紹介します。

- 「ピンクリボンって何？」
- 「ピンクリボンってAIDSのマークだけ？」
- 「うちの娘(20歳)に、子宮がん検診と一緒に乳がん検診も受けさせようと思うんです！」
- 「検診受けようと思ったら、もう終わってた…」
- 「いつどこで検診をやっているかわかりにくい」
- 「検診を受けてから結果が来るまでに二月以上もかかった…」
- 「子供がまだ小さいため、検診に行くときには子供を連れていかなければならない。マンモを受けている間、子供を見てくれるところがあるといいな～」
- 「検診を受ける場所があまり快適ではない…寒いし、プライバシーがあまり保てないし…慌ただしいし…」

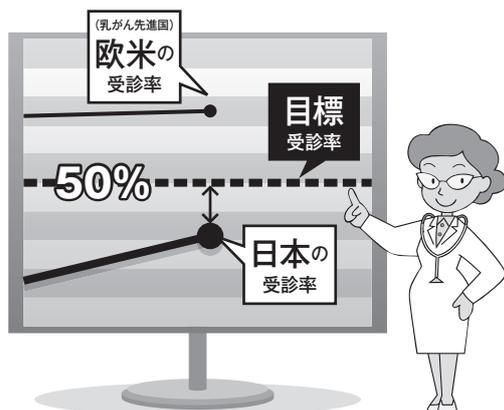
などなど…

まとめると、

- ①ピンクリボンや検診の重要性がまだまだ浸透しておらず、また乳がん検診についての理解がまだまだ乏しい。
- ②検診を受けることに対するハードルが高い。日時、場所、告知、検診の場の快適性、結果報告までの間隔などについて工夫が必要。

ということになるかと思えます。

これらの事情を考え併せると、まだまだ乳がん検診率50%を達成するのは遠いようです。今後もピンクリボン運動などを通じて啓発活動を粘り強く続け、乳がん検診を知ってもらい、理解してもらう必要がありますし、実際の検診の場では、少しでも快適な検診受診ができるよう努力と工夫をしていかなければいけません。まだまだ課題はたくさんありますね…



こんなピンクリボン運動をしました

1年を通じてピンクリボン運動が、多くの場所で多くの企業、団体、患者会、サークル、学生の方々を通じて推進をいただきました。前号でもご紹介いたしましたが、企業の社員の方々が街頭でピンクリボン運動を道行く人たちに呼び掛けていただき、社内外に乳がん検診の大切さを広報いただきました。本年度は、大学生、各種イベント主催者の方々からピンクリボンの広報を積極的に訴求したいという声が多くあり、実施をいただきました。多くの方々に支えられ、ご賛同、ご支援いただく方々と共にピンクリボン運動を更に推進していこうと思った1年でした。

いるモデルのMAIKOさんをイメージキャラクターにしたポスターの掲示と乳がん検診を呼びかける動画メッセージをHPに掲載し多くの方々にアクセスいただき乳がん検診の重要性を強くアピールすることができました。

今後も乳がん検診をあらゆる機会に呼びかけピンクリボン運動を推進していきたいと思っております。

JFRカード株式会社

母の日×ピンクリボン運動

平成21年に社会貢献の一環としてNPO法人J.POSHのオフィシャルサポーターに登録しピンクリボン運動をスタートいたしました。社内では、ピンクリボン啓発グッズの回転販売をはじめ社員の乳がん検診促進のために検診の補助等の活動しております。

当社の「さくらパンダ」カードには、社会貢献機能があります。年間のカード会員数と10月のカード利用額に応じてJ.POSHに寄付をする仕組みになっております。このような活動を通じて年々女性を中心にカード会員が増加しております。

昨年5月には「母の日×ピンクリボン運動」キャンペーンをグループの百貨店店頭で実施し、期間中、ご入会、一定額を利用いただくと、抽選で乳がん検診費相当額のギフトカードをプレゼントする企画で、多数の応募をいただき、乳がん検診に対する関心の高さが伺えました。10月の乳がん月間にも同様のキャンペーンを実施し、早期発見のための乳がん検診をお客様に呼びかける啓発活動を一層強化いたしました。合わせまして乳がんの治療をされて



ピンクリボン茶話会

私達同窓会が「ピンクリボン茶話会」を企画しましたのは、2012年9月28日から10月9日まで新宿のコンカミノルタプラザにおいて「ピンクリボン女子美術大学作品展」が行なわれ、317名の女子美術大学の学生作品が展示された事が始まりでした。

同窓会としてピンクリボン運動に共感し、作品はもちろんですが学生の社会参加、また女子の学校としてピンクリボン運動の認知拡大と早期発見への啓蒙運動につながればと講演会・映像・飲み物とスイーツによるクリスマスパーティーを計画しました。

同窓生の体験のお話は、治療やその後の生活やご姉妹にも同じ病魔が降りかかった事等、聞いている側にもいろいろな思いが伝わりました。若い人達との語らいの中でも、人ごとではなく自分たちで意識することが大事、それが早期発見につながる事など実感できるひとときでした。終了後、今後も是非続けて欲しいという声や、次はお手伝いをさせて下さいと言う参加者の申し出に心が熱くなりました。

同窓会から寄贈した2本のツリーに、学生達が200本以上のピンクのリボンを一人一人が結ぶことによって私達の想いが美しく形になりました。今後も、同窓会として若い世代に啓蒙活動としてつなげていければと思っています。

一般社団法人女子美術大学同窓会

女性として、美しく輝いてほしいから。

10月は乳がん啓発強化月間です。

乳がんは早期発見・早期診断・治療で治る確率が非常に高いんです。
JFRカードはすべての女性の笑顔を応援します。

JFRカード ピンクリボン運動 “乳がん検診”プレゼント 実施中!
2012年9月26日(水)～10月30日(火)

※期間中に、さくらパンダカードに毎月ご入金いただいた金額、またはANA CARD、マツザカヤカード、JFRカードのいずれか1枚以上のご入金いただいた金額に、毎月500名様に「乳がん検診」をプレゼントいたします。

※抽選は毎月20日(金)午後12時00分(現地時間)に行われます。

※詳しくは「乳がん検診」プレゼント実施要項をご覧ください。

※JFRカード、ANA CARD、マツザカヤカード、JFRカードのいずれか1枚以上のご入金いただいた金額に、毎月500名様に「乳がん検診」をプレゼントいたします。

※抽選は毎月20日(金)午後12時00分(現地時間)に行われます。

※詳しくは「乳がん検診」プレゼント実施要項をご覧ください。



MAIKO (モデル)

ピンクリボン運動のイメージキャラクターとして、乳がん検診の大切さを伝えるための活動を行っています。

MAIKOさんは、乳がん検診の大切さを伝えるための活動を行っています。

MAIKOさんは、乳がん検診の大切さを伝えるための活動を行っています。

JFR CARD DANMARU Matsuzakaya

JFRカード 10月の乳がん啓発強化月間ポスター

J.POSH 25年度の主な活動をご紹介します

継続性のある検診促進を目標とした活動

スマイルアップキャンペーン

家族から大切な人へ検診をプレゼント
母の日(5月第二日曜日) / いい夫婦の日(11月22日)

JMS(ジャパン・マンモグラフィ・サンデー)プログラム

毎年10月第三日曜日は、乳がん検診の日、
全国の医療機関に賛同いただき実施

LMG(女性放射線技師育成支援)プログラム

検診マンモグラフィ撮影認定診療放射線技師
講習会受講・受験のための参考図書代補助

ピンクリボンニュースジャパン(PRNj)

日本の乳がん医療や、各地のピンクリボン運動
のニュース・コラムを新聞にて発刊・配布

啓発リーフレット、ポスターの配布

乳がん検診の促進を目的とした啓発物の配布

啓発イベント・講演会

啓発イベント、講演会の主催、各地で行われる
イベント・講演会への共催、後援、協力、参加

都道府県マンモグラフィ検診の実態調査

全国自治体に対してアンケート調査を実施
J.POSHホームページ上にて結果を報告

自治体へのマンモグラフィ機器の寄贈

検診の普及促進活動の一環として巡回車搭載
型マンモグラフィ機器および検診車の寄贈

社会貢献活動への取り組み

まなび奨学金

罹患者のご家族へのサポート、高校生の就学支援

温泉ウエルカムネットワークプログラム

気軽に気遣いなくご家族そしてお友達と温泉を楽
しむために温泉施設に呼びかけをしております。

BCN(乳がん看護認定看護師)の育成、

BCS(乳がん治療専門家)支援プログラム

ハートシェアリングプログラム

患者会の活動をサポート

その他出版物の提供

ピンクリボン運動を推進していくプログラムが
13あり、継続性のある検診促進への取組と
社会性に分類いたしました。

PRNj 春号あとがき

NPO法人J.POSHも3月末日に24年度の事業年度が終わります。

さて、2012年度には4回目となりましたジャパン・マンモグラフィ・サンデー(JMS)プログラムですが、全国で340の医療機関に賛同いただき、10月の第3日曜日当日には約5,000名の方々に受診頂きました。医療機関はもとより、企業、個人、自治体、マスコミの方々も乳がん検診の大切さを広報いただき、大きな力になりました。

2012年度は、設立後10年を経、「乳がんAtoZ」を発刊いたしました。乳がんに関する各専門医、医療関係者、患者並びにご家族にご執筆をいただき、全国の図書館またご賛同いただいております企業、団体様にお送りいたしました。

2013年度も引続き、各プログラムの推進とPRNjを通じてさまざまな乳がんにかかわるニュースやトピックス、活動の紹介をお届けしたいと思います。

ピンクリボンNEWS japan編集委員

奥野 敏隆 (神戸アーバン乳腺クリニック)

軽部 真粧美 (自治医科大学附属病院 看護部)

重岡 靖 (淀川キリスト教病院 腫瘍内科)

田中 完児 (リボン・ロゼ田中完児乳腺クリニック)

蒔田 益次郎 (癌研有明病院 乳腺外科)

吉野 裕司 (石川県立中央病院 乳腺外科)

(五十音順・敬称略)